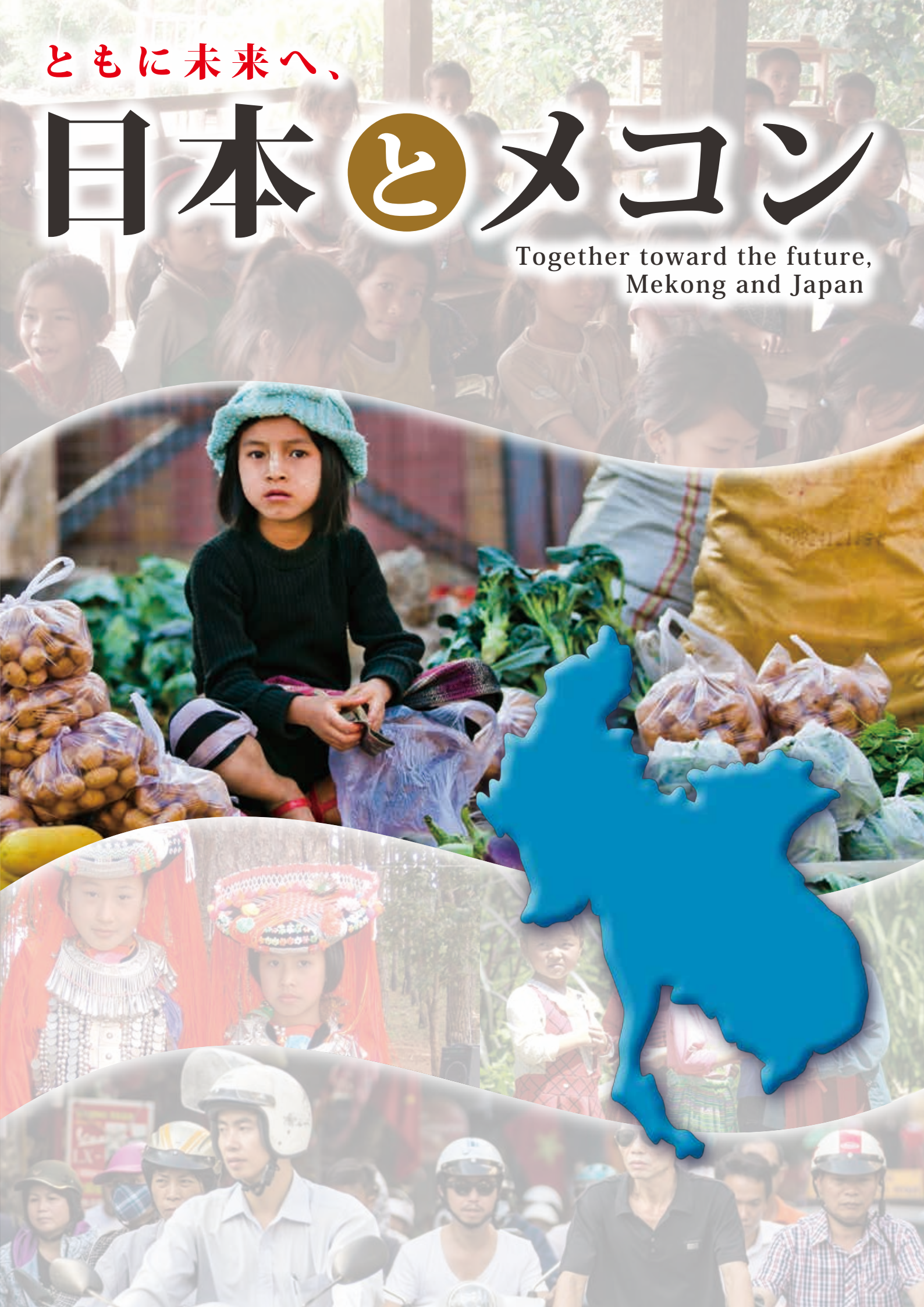
ともに未来へ、

日本とメコン

Together toward the future,
Mekong and Japan



メコン河が流れる国々

日　本
Japan

【面積】38万㎢
【人口】1億2,679万人
【1人あたりGDP】38,428.1米ドル

ミャンマー連邦
Union of Myanmar

【面積】68万㎢
【人口】5,337万人
【首都】ネーピードー
【主な言語】ミャンマー語
【主な宗教】仏教
【1人あたりGDP】1,298.9米ドル

130以上の少数民族が暮らす多民族国家で、働く人の半分以上が農業に携わっています。5,000万人を超える人口と豊富な天然資源、仏教遺跡などの多彩な観光資源を有しています。

ラオス人民民主共和国
Lao People's Democratic Republic

【面積】24万㎢
【人口】686万人
【首都】ビエンチャン
【主な言語】ラオス語
【主な宗教】仏教
【1人あたりGDP】2,457.4米ドル

50の民族が暮らすメコン地域で唯一の内陸国です。豊かな自然と資源に恵まれ、伝統的な親日国です。1965年に、日本の青年海外協力隊（JOCV）が初めて派遣された国でもあります。世界遺産の古都ルアンパバーンを中心に、観光開発も進んでいます。

タイ王国
Kingdom of Thailand

【面積】51万4,000㎢
【人口】6,904万人
【首都】バンコク
【主な言語】タイ語
【主な宗教】仏教
【1人あたりGDP】6,593.8米ドル

メコン地域の中心に位置し、人口の約85%を占めるタイ族を中心とした多民族国家です。1980年代以降、日本をはじめとする外国企業の受入を積極的に行い、経済発展を遂げました。豊かな自然と多様な文化を有し、長年、人気の旅行先の一つとしても親しまれています。

ベトナム社会主義共和国
Socialist Republic of Viet Nam

【面積】33万㎢
【人口】9,554万人
【首都】ハノイ
【主な言語】ベトナム語
【主な宗教】仏教
【1人あたりGDP】2,343.1米ドル

人口の9割近くを占めるベトナム族（キン族）の他に53の少数民族が暮らす多民族国家です。ドイモイ（刷新）政策によって、めざましい経済発展を遂げています。最近では観光地としての人気も高く、日本人観光客の数も増加しています。

カンボジア王国
Kingdom of Cambodia

【面積】18万1,000㎢
【人口】1,601万人
【首都】プノンペン
【主な言語】カンボジア語
【主な宗教】仏教
【1人あたりGDP】1,384.4米ドル

インドシナ半島の中央、メコン河と東南アジア最大のトンレサップ湖に代表される豊かな自然に恵まれた国です。主な産業は農業、工業、世界遺産アンコール遺跡に代表される観光業です。内戦を経験し、1992年に日本が初めて国連平和維持活動（PKO）に参加した国でもある一方、近年では首都を中心に経済発展を遂げています。

出典：世界銀行(2017)

～日本とメコン－その交流の歴史～

交流のはじまりは、およそ600年前から

日本からの留学生が中国大陸に渡る遣唐使の時代（8世紀頃）。遣唐使を乗せた船が暴風雨に巻き込まれてインドシナ半島に漂着、安南（ベトナム）と接点をもったと伝えられていますが、日本とメコン地域の交流が活発になったのは、いまから600年ほど前と言われています。当時、琉球（沖縄）が中心になってメコン地域を含む東南アジア諸国との間で活発な貿易が行われ、貿易船は日本や朝鮮半島にも来航し、交易品の転売をしていました。琉球がメコン地域との間に形成した貿易ルートは、後の朱印船貿易につながっていきます。

朱印船貿易で、日本人が次々メコンへ

江戸時代初期、幕府はメコン地域を含む東南アジア諸国に赴く貿易船に朱印状（幕府公認の海外渡航許可証）を発行し、海外交易を奨励するようになります。この朱印船貿易によって、多くの日本人がメコン地域に移り住み、アユタヤ（タイ）、ホイアン（ベトナム）、ウドン（カンボジア）などに日本人町が形成されました。また、当時の日本では、アンコール・ワット（カンボジア）が仏教の聖地である祇園精舎と考えられていたことから、日本人のアンコール参詣が盛んになるなど、日本とメコン地域の交流は密なものになりました。その後の江戸幕府の鎖国政策に伴い、朱印船貿易は衰退していきました。

アユタヤ日本人町跡。最盛期には1,000人を超える日本人が住んでいたと言われています

日本人が建設したと言われるホイアンの来遠橋（通称、日本橋）。その街並みはユネスコの世界遺産に登録されています

交流の再開、そして戦争を経て新たな時代へ

江戸幕府の鎖国政策によって途絶えていたメコン地域との交流は、明治時代になって再開されました。1887年には、「日暹（にちせん）修好通商に関する宣言」（日タイ修好宣言）により、タイとの間に正式な国交関係を樹立しました。これは明治政府が東南アジア諸国と外交関係を結ぶ最初の条約でした。その後、日本は1937年に始まった日中戦争の行き詰まりを打開し、石油などの資源を確保するため、南方に進出する南進政策を開始し、日本とメコン地域諸国は不幸な戦争の時代に突入しました。しかし、1945年の終戦、その後の国際社会への復帰に伴い、メコン各国との間でも国交を回復しました。日本とメコン地域諸国は、新たな交流の時代を迎えることになります。

かつてない広く深い交流の時代へ

戦後、日本は飛躍的な経済成長に伴い、政府開発援助の供与や企業の積極的な進出など、官民一体となってメコン地域諸国との交流を深めてきました。日本とメコン各国との間では要人の往来も活発で、1991年には天皇皇后両陛下がご即位後、初の外国訪問としてタイを、1999年には秋篠宮同妃両殿下が日本の皇室として初めてベトナムとラオスを、2001年にはカンボジアを、2018年にはタイをご訪問され、2009年2月には皇太子殿下がベトナムを、2012年にはカンボジア、ラオス、タイをご訪問されました。また、2017年には天皇皇后両陛下が国賓としてベトナムをご訪問され、その後タイにもお立ち寄りになりました。

日メコン協力を進める中、2008年1月に、東京で初めての日メコン外相会議、2009年11月には日メコン首脳会議を開催し、また2009年を「日メコン交流年」として、政治対話、経済・文化・青少年交流、観光といった様々な分野で交流を行いました。その後も継続して日メコン外相会議、日メコン首脳会議を毎年開催し、メコン地域諸国との幅広い協力を進めています。2019年は前回の交流年から10周年にあたることから，同年を「日メコン交流年2019」として各種交流事業が実施され、日メコンの交流は一層深いものとなっております。

日メコン協力のための東京戦略2018

日本とメコン地域諸国はこれまでも、地域の発展に向けて協力し、大きな成果を挙げてきました。
2018年10月の第10回日メコン首脳会議では、今後の日・メコン協力の方針である「東京戦略2018」が採択され、
日本とメコン地域が「戦略的パートナー」としてさらに協力を進めていくことで一致しました。

「東京戦略2018」で示された今後の日メコン協力の方向性（骨子）

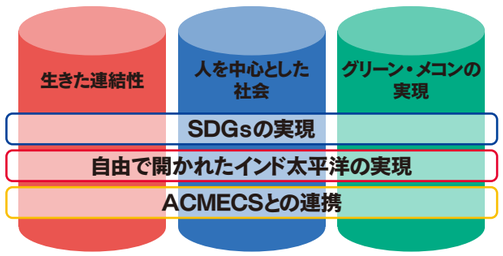
1 日メコン関係を戦略的パートナーシップに格上げ

2 東京戦略2018の3本柱
①生きた連結性、②人を中心とした社会、③グリーン・メコンの実現

3 持続可能な開発2030アジェンダを推進
持続可能な開発目標（SDGs）の実現に貢献するプロジェクトを特定。

4 自由で開かれたインド太平洋（FOIP）を実現
FOIP実現に向けた日本の政策を歓迎。
FOIPに貢献するプロジェクトを実施する決意を表明。

5 メコンの協力枠組みアクメクス（ACMECS）と連携
ACMECSマスタープランの実現に資するプロジェクトを特定。
ACMECS関連会合への参加についての日本の意図を歓迎。



※ACMECS（エーヤワディ・チャオプラヤー・メコン経済協力戦略）
タイの提唱により設立されたカンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオスの5か国間の協力枠組。日本政府は同枠組をメコン独自の取組として評価し，支援しています。

日メコン首脳会議・外相会議の開催

日本とメコン地域諸国（カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオス）との間では、頻繁に二国間会談が行われていますが、これに加えて、2008年1月の第1回日メコン外相会議、2009年11月の第1回日本・メコン地域諸国首脳会議（日メコン首脳会議）以降、毎年日本とメコン地域諸国との間で首脳級、閣僚級の協議の場が持たれ、日本とメコン地域諸国の協力について議論しています。日メコン首脳会議の開催地は概ね3年に1回、日本となり、その際に日メコン協力の今後の方針を決定しています。

2018年10月　第10回日メコン首脳会議（於：東京）（写真：内閣広報室提供）

微笑みの国からありがとう！切手や紙幣になった日本のODA

「東西経済回廊」構想の一環として建設された第二メコン国際橋の完成を記念して、橋のイラストを用いた切手がタイとラオス両国で発売されました。また、カンボジアとラオスでは、日本の政府開発援助によって建設された橋が紙幣や切手に印刷されるなど、日本の援助に対する感謝の気持ちが、様々な形で表現されています。

タイ・ラオス両国で発売された「第二メコン国際橋」完成記念切手

パクセー橋が描かれた紙幣（ラオス）

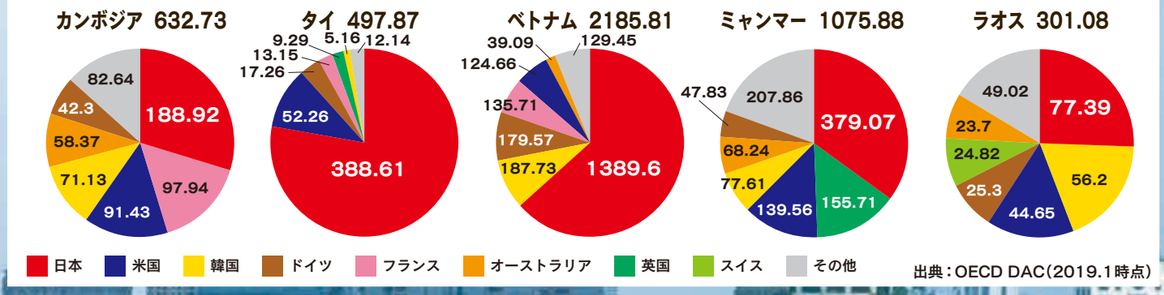
つばさ橋（左）ときずな橋（右）が描かれた紙幣（カンボジア）

数値から見るメコンとのつながり

日本は政府開発援助（ＯＤＡ）や、非政府組織（ＮＧＯ）などとの連携・協力によって、
多岐にわたる分野でメコン地域を支援しています。また、経済面での結び付きも着実に強まっています。
ここでは、ＯＤＡや投資、貿易に関わるデータを紹介します。

データで見る国別ODA実績

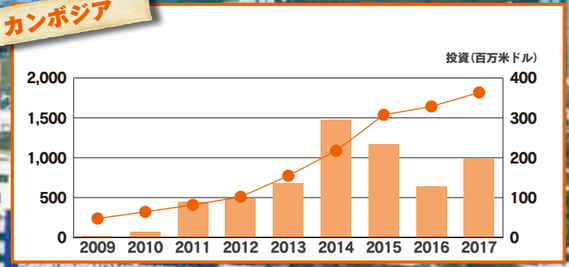
※2017年実績（支出総額ベース）、単位：百万米ドル



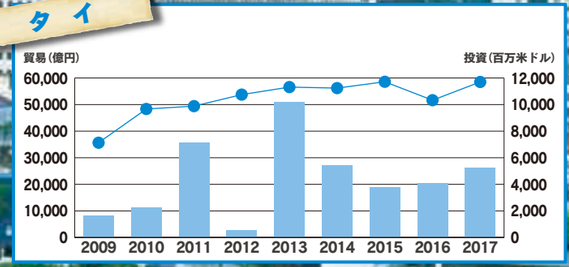
出典：OECD DAC（2019.1時点）

下記グラフの見方
●折れ線グラフ（　）は、日本との貿易総額推移を表しています。数値は各グラフの左軸に対応します。（出典：財務省貿易統計）
●棒グラフ（　）は、日本からの直接投資額推移を表しています。数値は各グラフの右軸に対応します。（出典：JETRO）
※2014年以降は計上原則が異なるため、それ以前とは比較不可能。

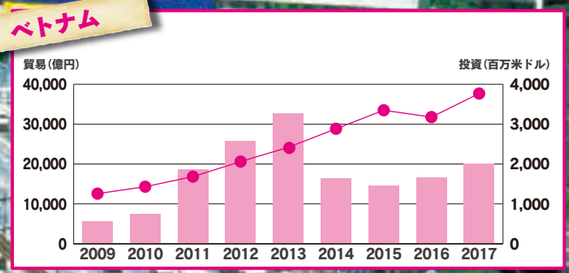
カンボジア



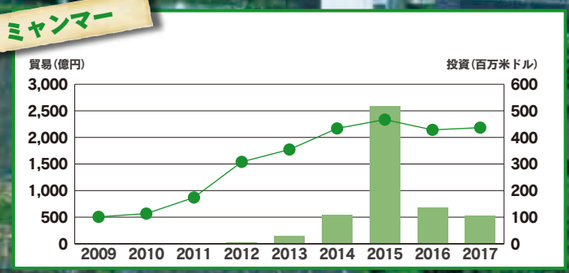
タイ



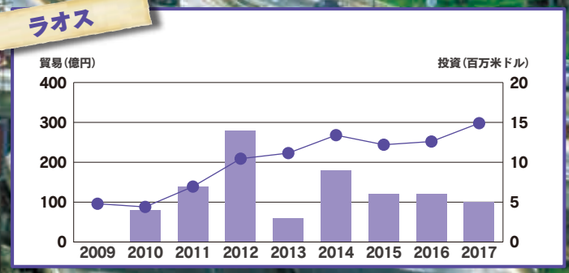
ベトナム



ミャンマー



ラオス



日本とメコン各国との間で結ばれた経済及び投資に関する協定

2007年11月　日・タイ経済連携協定発効
2008年　7月　日・カンボジア投資協定発効
2008年　8月　日・ラオス投資協定発効
2009年10月　日・ベトナム経済連携協定発効
2014年　8月　日・ミャンマー投資協定発効

生きた連結性～インフラ・システム・ビジネスのつながり～

中国、インド、ASEAN諸国といった巨大市場の結節点に位置するメコンの各地域は、
3つの経済回廊を中心に、そのつながりを年々強めています。メコン地域の連結性強化のため、
日本政府は東西経済回廊及び南部経済回廊の物流効率化のための支援を続けてきました。
今後も、ハード面でのインフラ整備だけにとどまらず、通関手続の円滑化などソフト（システム）面での整備を
支援するとともに、ビジネスマッチングや経済特別区（SEZ）の開発などを通じた産業面の連結性強化でも連携し、
メコン地域の「生きた連結性」の実現とさらなる発展に貢献していきます。

ヤンゴン・マンダレー鉄道

ミャンマー最大の経済都市ヤンゴンを起点に、首都ネーピードー、中部マンダレーまでの約620kmを鉄道で繋ぐ線路、設備の改修及び新規車両調達により近代化を支援します。（写真：JICA）

南北経済回廊

インドシナ半島を南北に縦断する回廊。中国雲南省・昆明を基点にタイ・バンコクまで南下するルートと、ベトナム・ハノイを結ぶ2つのルートに大別されます。

ワッタイ国際空港

ラオスの首都にある国際空港のターミナル等の整備を行い、空の連結性を強化しました。（写真：JICA）

第二メコン国際橋

全長約1,600m。タイとラオスを結んでいます。

ハイヴァントンネル

ベトナム中部地域の交通の難所であるハイヴァン峠に建設されたトンネル

東西経済回廊

インドシナ半島を東西に横断する回廊。ミャンマー・モーラミャインからタイ東北部を経由し、ラオス・サバナケット、ベトナム・ダナンを結ぶルートです。2006年12月には、タイとラオスを結ぶ第二メコン国際橋が日本の円借款により開通したことで、人・物の流通が円滑化され、地域の経済発展につながりました。

「つばさ橋」（ネアックルン橋梁）

全長5.46kmにおよぶメコン河に架かる橋。カンボジアのプノンペンからベトナムのホーチミンへの移動時間が大幅に短縮されました。（写真：JICA）

南部経済回廊

タイ・バンコクからカンボジア・プノンペンを経て、ベトナム・ホーチミンに至る回廊。2015年4月には、日本の無償資金協力による「つばさ橋」（ネアックルン橋梁）が開通し、交通が劇的に改善され、地域の連結性が向上されました。また、現在、カンボジア国道5号線等の整備が進んでおり、その完成によって大きな経済効果が期待される回廊です。将来的にミャンマー南部の都市ダウェーとも接続されれば、アジアの連結性に大きく寄与する可能性を秘めています。

ラオス国道9号線

タイからラオスを通ってベトナムに至る約240kmの幹線道路（写真：JICA）

ソフト連結性強化の取組

日本は、生きた連結性の実現のため，ソフト連結性強化の取組にも注力してきました。電子通関システムであるNACCS（Nippon Automated Cargo and Port Consolidated System）の導入を通じて，ベトナムでは簡易検査による通関処理時間を15分から1～3秒に短縮した支援は象徴的な一例です。2018年10月に発出された今後の日メコン協力の指針となる「東京戦略2018」において最優先課題の一つとして位置づけられた税関手続の近代化を含め、日本は、地域の経済発展と密接に関連させながら急増するソフト連結性の需要を満たすための取組を更に強化していきます。

（写真：JICA）

産業連結性強化の取組

メコン地域が、アジア全体の成長を取り込んで経済発展していくために、メコン地域の産業の連結性強化に取り組んでいます。日本企業の投資促進や日本企業と地場企業とのマッチングを更に進めるとともに、メコン域内のコネクテッド・インダストリーズ（※）の促進や、メコン域内の大学と連携したAI分野での人材育成支援など、新たなチャンスを生かして産業の高度化や人々の生活の向上に取り組みます。

※「コネクテッド・インダストリーズ」とは、人、モノ、技術、組織等が様々につながることにより新たな価値を創出し、産業競争力を強化する、日本の産業が目指すべき姿として提唱した概念です。

自由で開かれたインド太平洋

日本は、①法の支配、航行の自由、自由貿易等の普及・定着、②連結性の強化等による経済的繁栄の追求、③平和と繁栄の確保、の３本柱の下、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向け、様々な国と協力しています。メコン地域は、東アジアと南アジアを結ぶ「回廊」であると同時に、太平洋とインド洋とを結ぶ「陸の橋」でもあることから、その実現の鍵を握る重要な地域となっています。メコン諸国と共に、実現に向け、具体的な協力を着実に積み重ねていきます。

人を中心とした社会

メコン地域における経済発展を、より均衡のとれた持続可能なものとし、人と人の交流を通じた「人と人の連結性」の実現するため、日本とメコン地域諸国は協力していきます。政治・経済のみならず、スポーツ・文化交流、青少年交流、地方自治体交流、観光交流など、様々な分野・切り口での交流を進めるほか、「誰一人取り残さない」社会の実現に向けて、保健、教育分野の取組みなどでも連携していきます。

主な協力分野

- ○人材育成
- ○保健
- ○教育
- ○法律及び司法協力

アジア健康構想

日本型教育の海外展開推進事業（EDU-Port ニッポン）

グリーン・メコンの実現

美しく豊かな森林・水資源や生物多様性を有するメコン地域において、環境の保護と経済的繁栄を両立し、自然災害や気候変動に対して強靭な地域としていくことは、この地域が持続的に発展していく上で、大変重要なことです。緑あふれる「グリーン・メコン」の実現のため、日本は引き続き、メコン地域諸国と共に協力していきます。

主な協力分野

- ○防災及び気候変動
- ○水資源管理
- ○循環経済
- ○水産資源の保全及び持続可能な利用

東南アジア災害リスク保険ファシリティ（SEADRIF）

アジア水環境パートナーシップ事業

グリーン・メコン・フォーラム

日本とメコン地域諸国は環境分野における課題や知見を共有する場として、2011年より「グリーン・メコン・フォーラム」を開催しています。政府関係者のみならず、企業や国際機関関係者等の参加も得て、様々な議論が行われています。

第5回グリーン・メコン・フォーラム（於：バンコク）

メコン地域で活躍する日本のNGO

NGOとはNon-Governmental Organization（非政府組織）の略称で、開発援助・人道支援・環境などの地球規模の問題に取り組む非営利市民組織を指します。現在、国際協力活動に取り組んでいる日本のNGOの数は400以上とも言われ、各々の理念や目的意識に基づいて、政府中心の援助では対応が困難な草の根レベルのニーズを把握しながら、きめの細かい支援活動を展開しています。グローバル化が進展し、日本の国際協力の役割が更に重要となる中、政府開発援助の有効性を高める上でも、こうした活動を行うNGOとの積極的な連携が不可欠なものとなっています。政府が日本NGO連携無償（※）によって、保健、教育、農業、地雷処理などさまざまな分野で資金協力した案件数はメコン地域で40件（2017年度実績）。日本のメコン地域に対する支援活動の重要な担い手として、NGOの存在感はますます高まっています

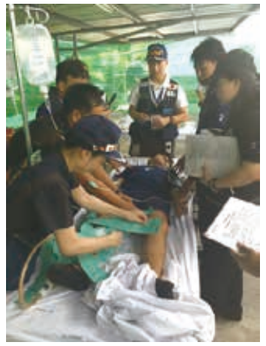
※日本のNGOが開発途上国・地域で実施する経済・社会開発事業に資金を供与する制度。

（公社）シャンティ国際ボランティア会がタイで実施された「タイ・ミャンマー国境の難民キャンプにおけるコミュニティ図書館を通じたノンフォーマル教育支援事業」

自然災害の多いメコン地域 ー 日本による支援の取組

近年アジア地域では、大規模な自然災害が多発しています。日本は、こうした災害の被災者支援のために緊急援助を行っています。2008年のミャンマーのサイクロン被害には医療チームを、2011年のタイの洪水被害には専門家チームを国際緊急援助隊として派遣しました。そのほか、洪水や地震等の被害を受けた国に対して、テントや毛布等の緊急援助物資も供与してきました。

また日本は、地域の災害対応能力向上に向けた支援も続けています。たとえば災害医療の分野において、メコン地域を含むASEAN地域内の連携を強化する取組として、ASEAN 災害医療連携強化プロジェクト（ARCHプロジェクト）を進めています。本プロジェクトではタイ保健省及び国家緊急医療機関（NIEM）を実施機関とした技術協力を通じ、災害医療におけるASEAN地域内連携の実践訓練、連携ツールの開発、研修等を実施しています。



ARCHプロジェクトの実践訓練における模擬診療（写真：JICA）

SDGs（持続可能な開発目標）

SDGs（持続可能な開発目標）は2015年9月の国連サミットにおいて全会一致で採択された、2030年を年限とする国際目標です。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、17のゴールとその下の169のターゲットから構成されています。日本は、安倍総理を本部長とし、全閣僚が参加する「SDGs推進本部」を設置し、SDGs実施指針やアクションプランを策定し、オールジャパンでSDGsを力強く推進しています。「東京戦略2018」においてもSDGsの実現を重視し、そのために日本とメコン地域諸国が協力して取り組んでいくことで一致しました。

Japan.
Committed
to SDGs

メコンを知る

日本人にとって、メコン地域諸国はあまり馴染みのない国々かもしれません。
しかし、悠久の歴史に育まれた伝統や文化を知れば知るほど、大河メコンに寄り添って生きる人々の温かみに触れれば触れるほど、メコンの魅力に惹きつけられてしまうはずです。ここでは、メコン地域諸国の伝統や食文化、そして日本との意外な共通点などなど、メコンにまつわる様々な話題をお届けします。

食事

お米が主食で、お箸を使って食べる。メコン地域の人々と日本人の食習慣はとても似ています。

ミャンマーの人たちがおやつ感覚で食べる麺料理「モヒンガー」

日本でもお馴染み、タイのスープ「トムヤムクン」

日本でも人気上昇中、ベトナムの「生春巻」

FOOD

伝統芸能

カンボジア、タイ、ラオスには老若男女が輪になって踊る風習があり、日本の盆踊りにも似ています。また、ベトナムには1000年以上の歴史がある、水上を舞台に色鮮やかな人形が物語や音楽に沿って繰り広げる水上人形劇があります。

カンボジアの宮廷舞踊である「アプサラダンス」

ミャンマーの民族楽器「竪琴（たてこと）」

タイ北部、チェンマイに伝わる踊り「フォーン・レップ」

ベトナムの水上人形劇

Traditional Arts

大衆文化

メコン各国では、漫画・アニメ・音楽など日本のポップカルチャーの人気も高まりつつあります。

カンボジアでは健康志向の高まりから、フィットネス人口が増加中

世界的に人気が高まりつつあるラオスのビール「ビアラオ」

メコン各国で一番人気があるスポーツと言えば「サッカー」。日本人選手も活躍中。

Pop Culture

文化遺産

メコン地域には、悠久の歴史をいまに伝える様々な遺産があります。

アンコール遺跡群（カンボジア）

アユタヤ王朝の遺跡群（タイ）

古都フエ（グエン朝）の遺跡群（ベトナム）

世界三大仏教遺跡の一つ、バガン（ミャンマー）

旧王都ルアンパバーン（ラオス）

Cultural Heritage

メコンおもしろ雑学

カンボジア

首都プノンペンの変貌ぶり

カンボジアといえば、世界遺産・アンコールワット遺跡。そこから約300キロ離れた首都プノンペンは、少し前まで高層ビルは皆無、街中は昔ながらのローカルなお店が主流のノンビリした街でした。ここ数年間で、街には高層ビルが建ち並び、お洒落なカフェやショッピングモール等が続々登場。レトロとモダンが交わりながら日々変貌する街・首都プノンペンにも注目です。

「煙管」「カボチャ」はカンボジアから

「煙管（きせる）」はカンボジア語の「クシアウ」から生まれた言葉。「カボチャ」は、朱印船貿易時代、カンボジアを経て日本にもたらされたという説が有力で、「カンプチアから来たもの」という意味を込めて名づけられたそうです。

タイ

微笑みの国、タイ

タイでは、笑顔の美しい人が尊ばれ、怒りなどの負の感情を人前で表すことは良く思われません。タイの正式な挨拶の作法は合掌（ワーイ）ですが、親しい仲間や家族同士では、微笑みが挨拶がわりになることも多いとか。

日本アニメはタイで大人気

タイでは、日本のアニメ「ドラゴンボールZ」や「ドラえもん」が大人気。日本のマンガがタイ語訳され、専門店も多くあります。コスプレ人気も高く、毎年開かれるイベントでは、アニメのキャラクターに扮したタイ人の若い男女のコスプレ姿も見かけられるようになりました。

ベトナム

もてなし上手のベトナム人

「食べる前に、周りに勧めるべし」というのが、ベトナムでの食卓のルール。食卓の中央におかずが並べられ、各自ご飯茶碗を片手に、「どうぞ召し上がれ」と一声かけあった後、周りの人の茶碗をこまめにチェック。茶碗が空いていれば、すかさず自ら手を伸ばして（時に立ち上がって）、相手の茶碗におかずを取り分けてあげるので、テーブルのあちこちから箸を持つ手が行き交います。

ベトナム人はグエンさんだらけ？

ベトナム人の姓で圧倒的に多いのが「グエン」。ここまで「グエン」姓が普及した理由は、ベトナム最後の王朝である「グエン朝」が、王と同じ姓を名乗っていい、という布告を出したから。これにより、多くのベトナム人が「グエン」姓を名乗るようになったわけです。姓だけ見ると「グエン」さんだらけのベトナムですが、通常は下の名前で呼ぶのが習慣になっているので、不便は感じないようです。

ミャンマー

生まれた曜日を大事にするミャンマー人

ミャンマーでは、生まれた曜日にちなんで子供の名前を付けるほど曜日が重要視されています。各曜日には、方角、守護動物、性格的特徴が定められています。また、パゴダ（仏塔）を訪問する際は、パゴダを中心として自分の曜日の方角にある祭壇を参拝する習慣があります。

日本サッカー創世記の立役者はミャンマー人!?

1920年代、日本の大学に留学していたミャンマー人留学生のチョウ・ディン氏は、当時の日本代表の候補選手達にショートパス戦法を伝授し、日本のサッカー技術は飛躍的に向上しました。その後、チョウ・ディン氏はミャンマー帰国後消息を絶ちましたが、当時の功績が称えられ2007年に日本サッカー協会により日本サッカー殿堂入りとなりました。

ラオス

ラオスの焼酎は泡盛の元祖？

ラオスの人々は伝統的にもち米を主食にしています。また、もち米からラオ・ラーオ（ラオスの酒、の意味）などのお酒も造ります。このラオ・ラーオは沖縄の泡盛に似た味わいで、泡盛の元祖という説もあるほどです。近年、JICAを通じた両国の協力で、沖縄の泡盛製造技術を取り入れたラオ・ラーオが開発されました。「美らラオ（ちゅららお）」と命名され、日ラオス両国の要人にも試飲されるなど、多くの人に親しまれています。

近くて遠い、ラオス語と日本語！？

ラオス語で「托鉢」は「タクバー（ト）」と言うなど、日本語と似ている単語もありますが、その一方で、「きれい」は「キレー（汚い）」のように、発音が同じでも意味がまったく異なる単語もあります。

写真提供：鎌澤久也、（公社）シャンティ国際ボランティア会、内閣広報室、日本アセアンセンター、Shutterstock.com〔五十音順、敬称略〕

日メコン協力や渡航情報などについては外務省ホームページをご覧ください。 http://www.mofa.go.jp/mofaj/

外務省　〒100-8919　東京都千代田区霞が関2-2-1 TEL:03-3580-3311（代）

編集：南東アジア第一課　発行：国内広報室

2019.3（一部改訂）